

学位論文要約

日中の「慰め場面」における言語行動の比較  
—発話者相互の「慰め」方略—

広島大学大学院教育学研究科

文化教育開発専攻日本語教育学分野

張 琳

# I. 論文構成（目次）

## 第1章 序論

- 1.1 研究の目的
- 1.2 研究の方法
- 1.3 本研究の構成

## 第2章 研究の枠組みと慰め行動に関する先行研究

- 2.1 ポライトネスに関する先行研究
  - 2.1.1 Grice (1975) の協調の原理
  - 2.1.2 Lakoff (1973) のポライトネスのルール
  - 2.1.3 Leech (1983) のポライトネスの原則
  - 2.1.4 Brown and Levinson のポライトネス理論
    - 2.1.4.1 フェイスの概念
    - 2.1.4.2 ポライトネス・ストラテジー (Politeness Strategy)
    - 2.1.4.3 フェイス侵害度の見積もり公式
    - 2.1.4.4 ストラテジーの選択を決定する状況
- 2.2 日中の対照研究に関する先行研究
- 2.3 慰め行動に関する先行研究
  - 2.3.1 「慰め」の定義
  - 2.3.2 他の言語行動との比較から見る「慰め」の特徴
  - 2.3.3 慰め行動に関する先行研究
    - 2.3.3.1 慰める側に注目した先行研究
    - 2.3.3.2 慰める側と慰められる側両方に注目した先行研究

## 第3章 慰める側の言語行動

- 3.1 分析データ
  - 3.1.1 調査期間・協力者
  - 3.1.2 調査方法・内容
- 3.2 分析方法
- 3.3 【開始部】の言語行動
  - 3.3.1 【開始部】の有無
  - 3.3.2 意味公式の分類
  - 3.3.3 日中の意味公式の比較
- 3.4 【情報共有部】の言語行動

- 3.4.1 意味公式の分類
- 3.4.2 日中の意味公式の比較
- 3.5 【慰め部】の言語行動
  - 3.5.1 【慰め部】の導入の主体
  - 3.5.2 意味公式の分類
  - 3.5.3 場面全体の結果と考察
    - 3.5.3.1 場面全体における日中の意味公式の比較
    - 3.5.3.2 「共感」の使用傾向
    - 3.5.3.3 「励まし」の使用傾向
    - 3.5.3.4 「助言」の使用傾向
  - 3.5.4 深刻度別の結果と考察
    - 3.5.4.1 深刻度による日中の意味公式の比較
    - 3.5.4.2 「共感」の使用傾向
    - 3.5.4.3 「励まし」の使用傾向
    - 3.5.4.4 「助言」の使用傾向
- 3.6 【終結部】の言語行動
  - 3.6.1 【終結部】の有無
  - 3.6.2 意味公式の分類
  - 3.6.3 日中の意味公式の比較
- 3.7 まとめ

#### 第4章 慰められる側の言語行動

- 4.1 分析データ・分析方法
- 4.2 【開始部】の言語行動
  - 4.2.1 意味公式の分類
  - 4.2.2 日中の意味公式の比較
- 4.3 【情報共有部】の言語行動
  - 4.3.1 意味公式の分類
  - 4.3.2 日中の意味公式の比較
- 4.4 【慰め部】の言語行動
  - 4.4.1 意味公式の分類
  - 4.4.2 場面全体の結果と考察
    - 4.4.2.1 場面全体における日中の意味公式の比較
    - 4.4.2.2 「感想述べ」の使用傾向
  - 4.4.3 深刻度別の結果と考察
    - 4.4.3.1 深刻度による日中の意味公式の比較

- 4.4.3.2 「感想述べ」の使用傾向
- 4.5 【終結部】の言語行動
  - 4.5.1 意味公式の分類
  - 4.5.2 日中の意味公式の比較
- 4.6 まとめ

## 第5章 「慰め」の相互行為と慰め行動への評価意識

- 5.1 「慰め」の相互行為
  - 5.1.1 分析データ・分析方法
  - 5.1.2 「共感」直後の言語行動
    - 5.1.2.1 「共感」直後の発話者
    - 5.1.2.2 慰める側の連続発話
      - 5.1.2.2.1 慰める側の連続発話の分類
      - 5.1.2.2.2 慰める側の連続発話の日中比較
    - 5.1.2.3 慰められる側の返答
      - 5.1.2.3.1 慰められる側の返答の分類
      - 5.1.2.3.2 慰められる側の返答の日中比較
  - 5.1.3 「励まし」直後の言語行動
    - 5.1.3.1 「励まし」直後の発話者
    - 5.1.3.2 慰める側の連続発話
      - 5.1.3.2.1 慰める側の連続発話の分類
      - 5.1.3.2.2 慰める側の連続発話の日中比較
    - 5.1.3.3 慰められる側の返答
      - 5.1.3.3.1 慰められる側の返答の分類
      - 5.1.3.3.2 慰められる側の返答の日中比較
  - 5.1.4 「助言」直後の言語行動
    - 5.1.4.1 「助言」直後の発話者
    - 5.1.4.2 慰める側の連続発話
      - 5.1.4.2.1 慰める側の連続発話の分類
      - 5.1.4.2.2 慰める側の連続発話の日中比較
    - 5.1.4.3 慰められる側の返答
      - 5.1.4.3.1 慰められる側の返答の分類
      - 5.1.4.3.2 慰められる側の返答の日中比較
- 5.2 慰め行動への評価意識
  - 5.2.1 分析データ
    - 5.2.1.1 調査期間・協力者

- 5.2.1.2 調査方法・内容
- 5.2.2 分析方法
- 5.2.3 慰められる側の意識の日中比較
- 5.2.4 深刻度別の慰め意識の比較
- 5.3 まとめ

## 第6章 結論

- 6.1 本研究のまとめ
- 6.2 ポライトネス理論から見た慰め行動の特徴
- 6.3 日本語教育への示唆
- 6.4 今後の課題

参考文献

付録

謝辞

## II. 論文要約

### 第1章 序論

相手の落ち込みを和らげ、苦しい状態から脱する手助けとなるのは慰め行動であるが、慰める側の意図が相手にうまく伝わらなければ、相手を傷つけ、余計に辛くさせてしまうこともある。さらに、人間関係にも悪影響を与え、関係の維持を危うくさせることも十分に考えられる。そのため、適切な慰め方略を用いるのは、円満な関係を構築、維持、発展させる上で重要なことであると考えられる。しかし、適切、かつ有効な慰め行動は、個人、言語、社会、文化によって基準が異なっている。

近年、日本語教育において学習者のコミュニケーション能力、特に語用論的能力の育成が重要視されている（水野 1996, 大浜 1998, 池田・三好・木村 2002, 徐 2007, 蒙 2008, 母 2011）。その成果から、学習者の日本語は、母語話者の日本語から逸脱し、誤解を招きやすいことが指摘されている（水野 1996, 徐 2007, 蒙 2008）。それは、異文化間コミュニケーションの際に、話し手が無意識に母語の社会文化規範や言語規範に従った原因であることが示唆されている（加奈・梅 2002）。円滑な異文化コミュニケーションを行うためには、実際の言語使用とともに、そこに反映されている社会文化や、相手への配慮の仕方を理解しなければならない。

異文化間で「慰め」を有効に行うためには、相手の属する社会文化の慰め方略を理解した上で、相手にとって受け入れられやすい慰め方略を用いることが必要である。並びに、相手の反応に応じて、適切な慰め方略を選択することが重要であると考えられるため、慰められる側の言語行動の特徴も探る必要がある。

そこで、本研究では、慰め場面に焦点を当て、慰める側と慰められる側の言語行動を分析の対象とする。また、話し手と受け手両方の振る舞いを考察し、相互行為の観点から会話のやりとりを分析することにより、日本語母語話者（以下、日本人）と中国語母語話者（以下、中国人）の「慰め」の会話展開の特徴を明らかにしていく。さらに、慰める側が効果を狙って発する言葉が、慰められる側にどのように評価されるかを探っていく。

本研究では、慰める側と慰められる側の両方の言語行動に焦点を当てることによって、これまで「慰める側」に一方向的に当てられていた「慰め行動」を相互行為として捉え直すことができると考えられる。

### 第2章 研究の枠組みと慰め行動に関する先行研究

本章では、研究の枠組みであるポライトネス理論の概観を行った。また、慰め行動の特徴を検討し、これまでの先行研究をまとめ、その成果と問題点を提起した上で、本研究の研究課題を提示した。

まず、ポライトネス理論については、その基盤となっている Grice (1975) の協調の原理をまとめた上で、Lakoff (1973) のポライトネスのルール、Leech (1983) のポライトネスの原則、Brown and Levinson (1987) のポライトネス理論について述べた。本研究の分析結果を解釈するための理論的枠組みとしては、ポライトネス理論を用いている。

「慰め」に関する先行研究として、関山 (1999)、馬 (2004)、中野・正保 (2011)、黒川 (2001) を整理した。慰め行動の対照研究である関山 (1999) と馬 (2004) で対象とされたのは、慰める側のみの言語行動だったが、慰め行動の実相をより明らかにするため、単に慰める側の一方的な言語行動のみを扱うだけでなく、慰められる側の言語行動もあわせて分析する必要がある。

慰める側と慰められる側の両方を扱ったものとして、中野・正保 (2011) と黒川 (2001) がある。中野・正保 (2011)、黒川 (2001) は、慰める側と慰められる側の意識に着目し、慰められる側の視点から慰める側の言語行動に対する期待や評価を調査、分析した。だが、慰められる側の言語行動の特徴や、慰め会話を展開する方法についての言及はなされていない。また、日本人のみを対象としているため、中国人の慰める側に対する慰められる側の評価は不明である。以上を踏まえ、本研究では、以下の4つの課題を設定して分析と考察を行い、慰め行動の特徴を多角的に考察していく。

- 1) 日本人と中国人における慰める側の言語行動の特徴は何か。(第3章)
- 2) 日本人と中国人における慰められる側の言語行動の特徴は何か。(第4章)
- 3) 慰め場面における相互行為はどのように行われるか。(第5章)
- 4) 慰める側の言語行動に対して、慰められる側はどのように評価を行うか。(第5章)

以上の課題を解明するために、本研究では「ロールプレイ調査」と「慰め行動への評価意識の調査」の2つの調査を実施した。「ロールプレイ調査」の結果は、第3章「慰める側の言語行動」、第4章「慰められる側の言語行動」、第5章の「『慰め』の相互行為」で扱う。「慰め行動への評価意識の調査」の結果は、第5章の「慰め行動への評価意識」で扱う。

### 第3章 慰める側の言語行動

本章では、日本人と中国人の慰める側として発した言語行動の特徴を考察した。

相手に具体的な慰め行動を行う前に、不幸な出来事を尋ねることによって相手の状況を把握するという点は日中で共通していた。しかし、状況把握の方法は少し異なっていた。日本人は「情報確認」を多く用いて相手の話を確認しながら、さらに話を促す傾向にあったのに対し、中国人は「未知情報要求」を多く使用し、積極的に会話全体の状況を把握しようとしていた。

相手を慰める際に、日本人は、相手の気持ちや考えに寄り添う「共感」を多く使用し、

いわゆる【同情同意型】の慰め方略を好むようであった。それに対し、中国人は、相手の悲観的な心理状態を改善する「励まし」や前向きなアドバイスを与える「助言」をよく用い、いわゆる【未来志向型】の慰め方略を好むようであった。

すなわち、日本人には慰める側として、まず「情報確認」を行い、相手の状況を把握した上で同調しようとする「共感」を示す傾向が認められた。一方、中国人は「未知情報要求」を用いて積極的に相手の状況を把握した上で、状況を改善しようとする「励まし」、「助言」を行う傾向があった。日本人は相手の気分と同調しようと配慮するのに対し、中国人は積極的に相手に関わろうとすることから、日本人と中国人が慰められる側に関心を示すのは共通しているが、それぞれで重視される方略は異なっていることが明らかとなった。

ポライトネスの観点から見ると、日本人は相手の気分と同調しようと気を配ることで、相手の干渉されたくないネガティブ・フェイスに配慮すると同時に、相手と同じ立場に立っている事を示すために相手のポジティブ・フェイスにも配慮するといえよう。一方、中国人は一刻も早く相手を苦境から脱出させることを重視するため、積極的に相手に関わろうとする。これはポジティブ・ポライトネスの表れであると考えられる。

#### 第4章 慰められる側の言語行動

本章では、日本人と中国人の慰められる側として発した言語行動の特徴を考察した。

不幸な出来事を相手に語る際に、日本人の慰められる側は出来事に関する情報を提供するという行動がほとんどであり、時系列に沿って出来事を発生した順に詳しく説明することを好むようであった。それに対して、中国人は会話冒頭に相手の関心を引きつけやすい表現を先に伝え、その後、出来事に関連する情報を提示しながら、事の顛末や自分の心情・感想を繰り返し述べることを好むようであった。

相手から慰めを受ける際、日本人は、「理解表明」、「事情説明」が比較的多く、相手が話した内容を承認しながら、事情を描写する傾向にあった。一方、中国人では、「感想述べ」、「心情表明」がよく使われ、自分の心情・感想を中心に述べ、相手の注意を引こうとする傾向にあることが明らかになった。

すなわち、日本人が慰められる側として、時系列に沿って出来事を発生した順に詳しく説明した後、相手からかけられた言葉を理解しながら、事情説明を行う傾向があるのに対し、中国人はまず事の顛末や自分の心情・考えを述べ、相手の興味を引きつける内容で事情を説明した後、相手に向けられた発話に対する自分の意見や感想をさらに述べる傾向にある。

日本人の場合、客観的な事実を中心として述べることは、相手に負担をかけないように使われるネガティブ・ポライトネス・ストラテジーであると考えられる。また、「理解表明」は相手の発話への理解・承認の表示を通して、相手の努力が無駄ではないことを示し、相手のポジティブ・フェイスに配慮したゆえの行動であると捉えられる。それ

に対して、中国人の場合、「感想述べ」、「心情表明」を多用し、積極的に自分の苦境を相手に示すことにより、相手に関心をもってほしいという欲求を満たそうとしている。自分のフェイスを犠牲にし、相手に頼らないといけない姿を見せることにより、相手の重要性を強調することで、相手のポジティブ・フェイスにも配慮することができるものと考えられる。

## 第5章 「慰め」の相互行為と慰め行動への評価意識

本章では、慰める側と慰められる側の相互行為、及び慰める側の言語行動に対する慰められる側の評価について考察した。

### a. 「慰め場面」における相互行為

日本人の慰める側は単独で「共感」を示し、慰められる側はそれに対して、肯定的な反応を行っていた。一方、中国人は、単独の「励まし」、「助言」と、それらを組み合わせたもので相手に慰めを行い、それらに対して慰められる側が「回避」、「否定」の反応で対応していた。これは、日本人の慰められる側が「理解表明」を、中国人の慰められる側が「感想述べ」を行うことが多かったことと関連している。「肯定」、「回避」、「否定」の返答の直後の慰める側の意味公式を検討した結果、日本人は「肯定」の返答に対して、慰める側はさらに「共感」を示し、互いに承認し合いながら会話を進める傾向にあり、中国人は「回避」、「否定」の反応に対して、慰める側がさらに相手を説得するため、相手の落ち込みを解消させたり、問題の解決策を提示したりして、相手の現状を改善しようとする傾向にあった。これが、日本人の「共感」の多用、中国人の「励まし」、「助言」の多用の原因の一つと考えられる。

### b. 慰める側の言語行動に対する慰められる側の評価

慰められる側による、慰める側の慰め行動への評価意識調査の結果を分析した結果、慰める側の「慰めになると意図してかけた言葉」は、慰められる側にとって概ね評価が高かったが、そうでないものも見られた。

ロールプレイでは、日本人は「共感」をよく相手に示し、中国人は「励まし」、「助言」を多く行っていた。アンケート調査でも、日本人は「共感」に対する評価が最も高く、中国人は「励まし」、「助言」に対する評価が高かった。また、日本人の慰める側について、「励まし」は中国人ほど多くはないが、「共感」を除く他のすべての意味公式より多く使われていた。その一方で、アンケート調査では「励まし」への評価は低いという相反する結果が示された。これは中国人の「共感」の場合にも見られた。中国人の慰める側は日本人ほど多くはないものの、「共感」を他の意味公式よりも多く用いていた。それに対して、「共感」への評価は低かった。「共感」、「励まし」は相手の気持ちに寄り添い、悲観的な気分を解消させようとする発話であるため、相手の消極的な心理状態を回復させようとする基本的な戦略であると考えられる。そのため、慰められる側が好ましく感じていなくても、慰める側は有効な慰め的手段としてよく用いていると考

えられる。

## 第6章 結論

本章では結論として、第3章から第5章のまとめ、日本語教育への示唆と今後の課題を述べた。

本研究では、慰め行動を行う話し手と受け手の両方に焦点を当て、日中それぞれの言語行動を分析した上で、相互行為の観点から日中の「慰め」における会話展開の特徴を明らかにした。図1, 2に本研究で明らかにした結果を示す。

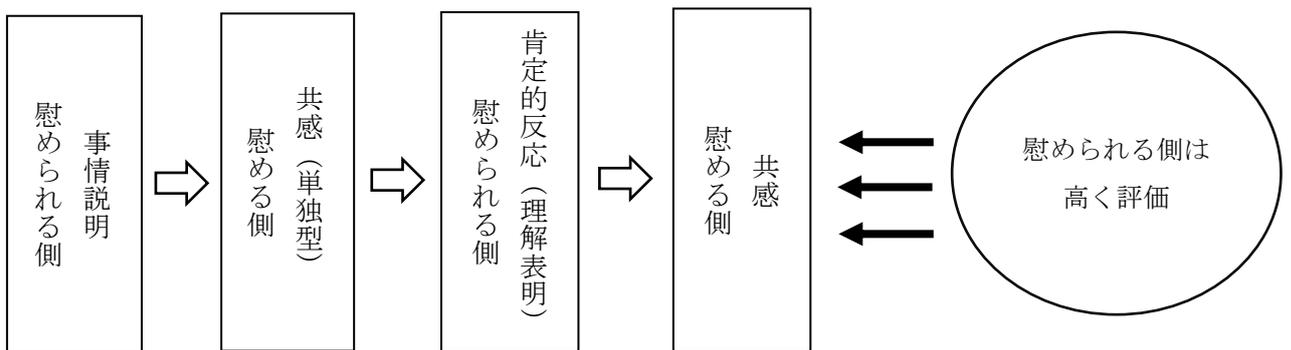


図1 「慰め行動」における日本人の特徴

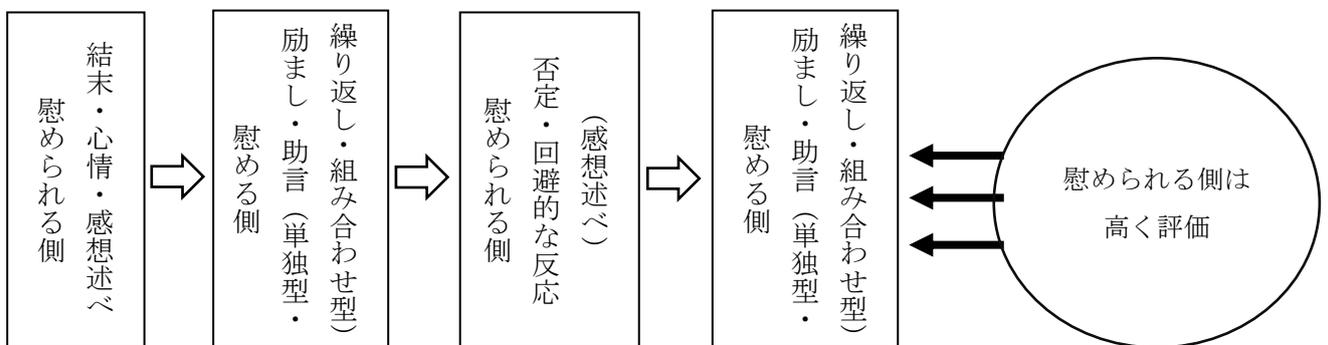


図2 「慰め行動」における中国人の特徴

日本人の慰められる側は最初に「事情説明」を行い、相手に負担をかけないように不幸な出来事を述べ始める。それに対し、慰める側は単独で「共感」を示すことにより、相手への理解、承認を表す。その後、慰められる側が相手から示された「共感」に対して肯定的な反応で対応し、相手の努力への承認を表示する。肯定された慰める側は共感を用い続けて相手にさらに慰めを行う。一方、中国人の慰められる側は、相手の関心を引きつけようとし、「結末述べ」、「心情表明」、「感想述べ」を最初に伝える。慰める側が単独の「励まし」、「助言」と、それらを組み合わせたもので、相手の問題を解決し、現状を改善させようとする。それに対して慰められる側が「回避」、「否定」の反応で自

分の苦境を強調し、慰めを求める。慰められる側の要求に応じて、慰める側が再度「励まし」、「助言」を行い、相手の悲観的な気分を解消するように努力する。日本人は、慰める側と慰められる側が互いに承認や親しみを示し合いながら、慰め会話を展開させる。それに対して、中国人は、慰める側と慰められる側が意見、感想を交換し合い、問題を乗り換えることを目指しながら慰め会話を進めていくのである。

本研究で明らかにしたように、慰め行動を行う話し手と受け手両方の発話内容だけでなく、「慰め」の会話構造も、日本人と中国人とでは大きく異なる。本研究の結果は、「慰め」という行動において、日本人と中国人とでどの部分が異なるかを明らかにしたものであり、異文化間コミュニケーションにおける誤解や摩擦の回避に寄与するものである。ただし、本研究は、親友という特別な人間関係の中での分析結果であり、すべての人間関係の中で分析しているわけではない。今後、親友関係以外の様々な人間関係の枠組みの中で、特に、社交辞令として使われる慰め発話、いわゆる疎の関係での慰め行動がどのように展開されるかを、さらに検討していく必要があるだろう。どのように慰めの相互行為が遂行されていくのかを明らかにすることで、それぞれの人間関係をより詳細に把握していくことが可能になると考える。また、「慰め」の実際の場面では、言語行動だけでなく、相手を抱き締めたり、肩を叩いたりするなどの非言語行動を用いて相手に慰めを行うことも多いと考えられる。日本人と中国人はどのような状況で、どのような非言語行動を用いるのかを詳しく分析していく必要がある。言語行動と非言語行動の使用実態を明らかにすることで、慰め行動の全体像を解明する手がかりになると思われる。本研究を、これらの課題解明のための第一歩と位置づける。

## 参考文献

- 池田裕・三好理英子・村木万里子（2002）「中国語話者と英語話者の日本語における依頼ーロール・プレイによる発話データの分析ー」『多摩留学生センター教育研究論集』（東京学芸大学）第3号，51-60.
- 宇佐美まゆみ（2002）連載「ポライトネス理論の展開（1ー12）」『月刊言語』第31号，毎号6頁.
- 大浜るい子（1998）「日本人の言語行動ー話展開のためのストラテジーー」『広島大学日本語教育学科紀要』（広島大学）第8号，97-105.
- 加奈陸人・梅暁蓮（2002）「日中両国語におけるコミュニケーション・ギャップについての考察」『言語と文化』（文教大学）第15号，19-41.
- 黒川直美（2001）「日本語母語話者により『励まし』行為の特徴」横浜「言語と人間」研究会5月例会研究報告，<http://sekky.tripod.com/0105kurokawa.html>.
- 塩見式子・米澤昌子（2008）「『慰め・励まし』の様相ーシナリオを例としてー」『関西外国語大学留学生別科 日本語教育論集』（関西外国語大学）第18号，1-15.

- 徐孟鈴 (2007) 「依頼会話【先行部】の考察—日本語母語場面, 台湾人母語場面, 日台接触場面のロールプレイデータを比較して—」『言語と文化』(名古屋大学) 第8号, 219-237.
- 関山健治 (1999) 「英語での慰め表現にみられる母語からの語用論的転移—日本人英語話者の場面—」『ことばと人間』第2号, 1-12.
- 滝浦真人 (2005) 『日本語の敬語論—ポライトネス理論からの再検討—』大修館書店
- 滝浦真人 (2008) 『ポライトネス入門』研究社.
- 田中妙子 (2012) 「ドラマのシナリオに見られる『慰め発話』の諸相」『日本語と日本語教育』(慶應義塾大学) 第40号, 49-67.
- 中野友貴・正保春彦 (2011) 「励ましの言葉の受け取り方に関する—考察—発話群・発話期待群の比較から—」『茨城大学教育実践研究』(茨城大学) 第30号, 13-25.
- 馬曉娟 (2004) 「談話における日中対照研究—慰め表現から—」『東京女子大学言語文化研究』(東京女子大学) 第13号, 54-67.
- 母育新 (2011) 「依頼行動における中国人日本語学習者の問題点—ディスコース・ポライトネス理論の観点からの考察—」『日本研究教育年報』(東京外国語大学) 第15号, 41-56.
- 水野かほる (1996) 「依頼の言語行動における中間言語語用論—中国人日本語学習者の場合—」『名古屋大学言語文化論集』(名古屋大学) 第2号, 91-106.
- 蒙韞 (2008) 「中国人日本語上級学習者の語用論的転移の考察—依頼に対する断り表現のポライトネスの表し方から—」『国際開発研究フォーラム』(名古屋大学) 第36号, 241-254.
- Brown, P. and Levinson, S.C. (1987), *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Brown, P. and Levinson, S. C. (1987), *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press. [田中典子監訳 齊藤早智子・津留崎毅・鶴田庸子・日野壽憲・山下早代子訳 (2011) 『ポライトネス言語使用における, ある普遍現象』研究社]
- Grice, H. P. (1975), *Logic and Conversation*. In P. Cole and J. Morgan (Eds.), *Syntax and Semantics 3. Speech Acts* (pp. 41-58). New York: Academic Press.
- Grice, H. P. (1989), *Studies in the Way of Words*. Harvard University Press. [清塚邦彦訳 (1998) 『論理と会話』勁草書房]
- Lakoff, Robin. (1973), *The Logic of Politeness; or, Minding Your P's and Q's*. In *Papers from the Ninth Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society* (pp. 292-305). Chicago: Chicago Linguistic Society.
- Leech, G. N. (1983), *Principles of Pragmatics*. London: Longman. [池上嘉彦・河上誓作訳 (1987) 『語用論』紀伊国屋書店]